

世界のカワグチになつた、慧海

高山 龍三

たかやま りゅうぞう / 1929年大阪市生まれ。大阪市立大学、同大学院修了。東京工大、東海大、大阪工大、京都文教大教授を歴任。おもにヒマラヤ・チベットの民族誌、アジア文明論、近年は河口慧海研究。主著『環境・人間・文化』『河口慧海』『展望河口慧海論』、共著『河口慧海日記』『チベット旅行記』の校訂、『河口慧海著作集』の監修・編集。

河口慧海は前世紀初、仏教の原典を求めて、当時

禁断の地であつたチベットに入国した。師とわたしとの出会いは、ちょうど半世紀前、ヒマラヤ奥地のとあるチベット人の村から始まる。約三カ月住み込み調査をしたこの村は、慧海が二日逗留し、名著『チベット旅行記』に、チベットへ越境する前、ネパール最後の村名として記した村であつた。以来わたしは慧海にとりつかれ、慧海に関する資料を国内外に求め、現在国内一三三三三三、国外四六九点を数えている。近年急増したのはインターネットの「書籍検索」や「論文検索」によつてえた情報で、それをたよりに文献に当たり、収集した。二〇〇一年から「国内の著作にみる河口慧海」として、『黄檗文華』に連載、現在(八)を数えている。

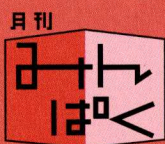
最近わたしは「過去のニュース記事の検索サービス」で、慧海帰国直後の外国報道があることをいくつか知つた。一九〇三〜一九〇四年、慧海を報じた新聞雑誌一六のうち、少なくとも八つは一人の女性が書いたか、それを引用した記事であつた。

その女性とは、米国出身のエリザベス・アーマー・シンドモア(一八五六〜一九二八年)。彼女は一八八四年来日『シドモア日本紀行』(一八九一年改訂版一九〇二年、日本語訳二〇〇二年)を出版、紀行作家として本を書き、のち

日本の桜をワシントンに送る事業の実現に尽力した。

帰国直後、時事、大阪毎日二紙の独占連載のための口述筆記で、京都東山の某別荘にカンツメになつていた慧海に、彼女は会つてインタビューし、「ワサからの最新ニュースー河口慧海師の個人的冒険談」をまとめ、自ら序文を付し、慧海の名で『センチュリー・マガジン』(六七巻、一九〇四年一月)誌に載せた。また彼女自身『シカゴ・デイリー・トリビュン』紙に「日本僧チベットに一年(一九〇四年一月三日)」を寄せた。その後、米国、ドイツ、イタリアの紙誌の記事や、ウオツテル(ワサとその神秘)やシユレマン(『ダライ・ラマの歴史』)の本にその引用が見られる。

もう一人の女性アニー・ペザント(一八四七〜一九三三年)は、英国の労働運動家であつたがインドに渡り、第二代神智学協会会長となつた。また彼女は『旅行記』の英訳本『チベットの三年』の出版(一九〇九年)におおきく貢献した。あきらめかけた慧海に出版を勧め、私財を投じて後援した。しかも出版直後数多くの書評の出ているのがネット検索でわかつた。



目次

FEBRUARY 2009 2
月刊みんぱく

01 エッセイ 世界へ世界から
世界のカワグチになつた、慧海
高山 龍三

02 特集 刺繍がつなく世界

グローバル化する南アジアの刺繍
金谷 美和
バンナー地方で未来を刺繍する
ムトワの女性と変化
ミシェル・ハーディ

インドの手ざわりを取り入れた
ファッション・ブランドHaaT
皆川 魔鬼子

08 女性たちを変えた「ノクシカタ」
小松 豊明

08 モノ・グラフ
モンスーンアジアの人びとと竹
吉田 裕彦

10 地球ミュージアム紀行
小さな大学博物館の大きな可能性
小島 摩文

11 表紙モノ語り
子ども用帽子
中谷 純江

12 みんなくインフォメーション

14 万国津々浦々
ライオンの肉を食べる
池谷 和信

15 時論・新論・理想論
日本発「手学問のすゝめ」、世界へ
広瀬 浩二郎

16 外国人として生きる
同郷者との絆を大切に今日も走る、
インドネシア人の営業マン
スリ・プティ・レスタリ

18 歳時世相篇
⑪バレンタインデー
チョコレートの正体
八杉 佳穂

20 生きもの博物誌
長い冬ごもりにそなえて
藤原 潤子

22 フィールドで考える
ミンダナオ島にゴング音楽を求めて
寺田 吉孝

24 みんなく ウィークエンド・サロン
研究者と話そう
次号予告・編集後記